
珈琲

いろは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

珈琲

【Nコード】

N91230

【作者名】

いろは

【あらすじ】

日岳。とっても真面目に恋してるがつくんの話。 あなたと私の間には壁はもうないのよ、みたいな話。

(前書き)

日滝要素あり。

自分は冬より夏の方が好きだな、と改めて思う。降り積もる白い雪は好きだが、やっぱり冷たいプールや虫の鳴く音の方がわくわくする。何より、自分は寒いのが苦手だ。冷たい風が容赦なく吹きつけ、自分の体温を奪っていくのを感じると、何だか責められているような気がするのだ。でも、二人で歩いているとそれもちょっと、落ち着くかも。

秋から冬へ、季節の変わり目。11月も終盤に差し掛かったある日、俺はそんなことを考えていた。何だかほっとしたような、嬉しいような気分になって、隣を歩く恋人に声を掛ける。

「日吉」

「何ですか？」

「…寒いな」

「寒いですね」

声を掛けたはいいいものの、特に話題を用意していた訳ではない。適当に話を振ってみるが、返ってくるのも適当な、何の面白味もない返事。

それでいい。充分。俺はこのやりとりだけで、俺の隣に日吉がいるって確認出来る。俺、幸せだなんて思うことが出来る。

ああ、俺、日吉が好きなんだなあ。

…なんて短い間で俺はしみじみと自分の幸せを実感していたのだけれど、日吉の方はまだ話が終わっていなかったらしい。

「良かったら、何か飲み物買っていきませんか？」

日吉がこんな事を言い出すのは珍しかった。

何時もは大体俺が、疲れた喉乾いたなどと駄々をこねて、日吉は、はいはい分かりました本当に世話の焼ける人ですね向日さんはとか何とか嫌味を言いつつ、結局俺に付き合ってくれる。だから、今日は俺が日吉に合わせてやる番だ。

「いーぜ！何か奢ってやるよ」

「それは別に結構です」

折角俺が先輩らしいところを見せようとしたのに、日吉は可愛げというものがない。ま、いつか。

「日吉何飲むの？」

いつも学校の帰りに飲み物を買う自販機の前で、小銭を探しながら何気なく俺は日吉に聞いた。

「俺は珈琲にします」

出た。また珈琲。こういう時、いつも日吉は珈琲を飲んでいる。しかも、無糖のすごい苦いやつ。いつだったか俺が、よくそんなもの飲めるよなって言ったら、向日さんの味覚が子供なんですよとか言

われた。

それ以来俺は珈琲を飲む日吉を見る度に、自分が日吉より幼いと言われているような気分になる。

「……俺メロンソーダ」

日吉に小銭を渡しながら、ぼそつと呟く。ああそつだよ、俺は十五にもなつて、珈琲も飲めない、メロンソーダが大好きな餓鬼だよ。

「この寒いのにまたそれですか？アンタも好きですね」

「うるせーよ、さっさと買え」

はいはい、と日吉は小銭を自販機に入れ、まずメロンソーダのボタンを押す。そして日吉の細長い指はすると移動し、珈琲のボタンの上で止まる。

ぽちっ

「…本当に、よくこんな甘いもん飲めますね」

がちゃん、と二つのアルミ缶が落下する音に合わせて、日吉が呟いた。

それは俺に言ったというよりも、むしろ独り言に近かったが、でも俺は聞いていた。

黙って日吉からメロンソーダを受け取り、ごくごくと飲む。何だかいつもより甘ったるく、冷たく感じる。なんかさつきよりも寒くなってきた。ホットココアにすれば良かったかな。でもホットココアも、日吉にとっては子供が飲むものなんだろうな。

「…寒い」

「だから言っただでしょう」

日吉は呆れ顔で俺を見る。どうせまた俺のこと餓鬼だと思ってんだろ、くそくそ。

「お前のよこせ」

「アンタ苦いの苦手でしょう」

「うつせーよ！いつまでも餓鬼扱いすんじゃないねえ！」

思っていたことがそのまま口に出てしまった。我ながら子供じみた台詞だと思うが、もう半分やけくそだった。

日吉の手から珈琲を奪って、そのまま口を付ける。苦味が一気に俺の口の中に広がった。

「苦っ！」

思わず叫ぶ。メロンソーダの後だから、余計に苦く感じる。こんなに苦いもん、どこが美味しいんだよ。

涙目になった俺を見て、言わんこっちゃない、と言わんばかりの顔で日吉は俺から珈琲を取り上げた。

そして大して美味くもなさそうに、ゆっくりと珈琲を飲む。

「…美味しい？」

「別に美味くはないです」

「じゃあ、何でわざわざ飲むわけ？」

「甘いのは口の中にずっと残るし…頭をすっきりさせるのにも丁度良いんですよ」

「よく分かんねえ…どうせなら美味いって思うやつ飲めば良いのに」
「向日さんに分かって頂けるとは思っていないので」

面白くない。

何だかすごく、面白くない。さっきまでの幸せな気分が嘘のようだった。

でも俺は、この面白くない気持ちを認めたくなかった。認めたくなくて、誤魔化すようにメロンソーダを喉に流し込む。

それは一気に俺の口の中の珈琲の苦味を消し去った。けれど、俺の中のむしゃくしゃしたものは、やっぱり喉の奥にこびりつくように残った。

日吉は無表情で珈琲を飲みながら、不機嫌そうにメロンソーダを飲む俺を黙って見ていた。

甘い。冷たい。

普段は一滴も残さず飲み干すメロンソーダ。今日は全然美味しくなくて、まだほんの少し重いアルミ缶を、俺はゴミ箱に投げ入れた。

今日は寒い。だから、メロンソーダが美味しくないんだ。きっとそうだ。次はホットココアを飲もう。

どうせ俺は、珈琲を飲めないんだから。

その翌日、俺は誰もいない学校の中を一人で歩いていた。普段は生徒の笑い声や教師の怒鳴り声、ボールが弾む音やピアノの音色が響いているこの建物は、今は何だかよそよそしさを持って俺を迎えている。

こうして歩いていると、何だか寂しい気分になる。自分が学校の中に閉じ込められてしまったような、そんな気分。

早く出たい。でも、俺は侑士から借りたノートを教室に置いてきてしまった。あれがなければ、次の期末試験の数学はほぼ壊滅的な成績だろう。それは何としても避けなければならない。だから俺はわざわざ帰り道を引き返して、ノートを取りに来たのだ。校門に日吉を待たせている。急がないと。

自分の教室に辿り着き、ドアを開ける。すると、見知った人物が目に入り俺は思わず声を上げた。

「…滝？」

ゆっくりと振り返るその人物は、俺のクラスメートで、部活仲間でもある滝萩之介だった。

「岳人？まだ帰ってなかったの」

「いや、忘れ物して戻ってきただけ…。お前こそまだ帰ってなかったのかよ」

「僕は勉強」

ほら、と滝は机に広がる教科書とノートを俺に見せた。

「テスト前だからねー、頑張らないと」

「テスト前つつてもまだ二週間あるだろ…一人居残り勉とか頑張りが過ぎじゃね？」

「あはは、部活も引退しちゃったし、言い訳利かないからね」

滝は成績が良い。俺も悪くはないけど、多分滝と競えるのは英語位だと思う。滝は全科目満遍なく良い点数を取ってくる。それはやっぱり、こうやって真面目に勉強しているからなんだろう。素直に尊敬する。真似はしないけど。

自分の机の中をがさがさと漁ると、目的の物はすぐに見つかった。

「岳人も一緒に勉強する？」

くすくすと笑いながら、絶対に乗ってこないと分かる誘いをかける滝。

正直なことを言うと、俺は滝が苦手だった。

何を考えているのかよく分からないし、何より。

「…いや、いい。人待たせてるし」

「…そっか」

一瞬、滝の笑顔が消えたように思えたのは気のせいだろうか。

人。自分でも回りくどい言い方だと思う。テスト前は全学年（今は三年生は引退しているが）部活動は休みになる。それは、テニス部

も例外ではなくて。

「じゃあ早く行ってあげないと。こんなに寒い中待たせたら可哀想だよ」

「誰」を待たせているのか。聞かなかったのは滝の優しさだろう。こんな寒い中、俺が忘れ物を取ってくるまで待つてくれる奴なんてこの学校で一人しかいない。分かりきった事実を、滝は聞かない。

「じゃあな、勉強頑張れよ」

「岳人もね」

軽い挨拶を交わし、教室を出ようとしたその時。滝の机に置かれたアルミ缶のラベルを見て、俺は足を止めた。

「…それ」

俺の目線に気が付いたのだろう。

「ああ、これ？」

滝が軽く揺らすと、ちやぶ、と中に残っていた液体が音を立てる。

「別に美味しくはないんだけど、勉強で疲れた時とか頭がすっきりするんだよねー」

くすりと笑って、滝はそれに口を付けた。

珈琲。無糖の、すっごい苦いやつ。

「…岳人？どうかした？」

俺は思っていることが表情に出やすいらしい。多分、今がまさにそうなんだろう。

「いや…お前とおんなじこと言ってる奴いたよ」

「へえ、誰？」

今俺を待つてる奴。

お前の、元彼氏。

…とは流石に言えず、誰だったかは忘れた、などと適当に誤魔化しながら俺は教室を後にした。

また明日、と手を振る俺の綺麗な笑顔が、妙に恨めしかった。

俺は、綺麗だ。

男に綺麗なんて表現、可笑しい気がする。でも俺には一番ぴったりの言葉だ。

美しく切り揃えられた髪は、いつも手入れが行き届いていて、乱れているところなんて見たことない。切れ長の目は透き通っていて、じっと見つめられると不覚にもどきりとしてしまう。声だつて決して高くない、低い男のそれなのに、何故か耳に心地良く響き、人を安心させる。

そして何より、俺は大人びていた。
率先して人の上に立つタイプではなかったが、周りによく気を使い、陰でそつとサポートするのが得意だった。困っている時、いつもの

確なアドバイスをくれるのは滝である。

後輩からの人望も高く、悩みを聞いている場面も何回か見たことがある。決して目立ちはないがテニス部にとって必要な存在、それが滝萩之介だった。

日吉と滝が付き合い始めたのは、いつからだっただろう。あんまり覚えていない。ただ、一度だけ二人並んで学校から帰っているところを見たことがある。

あの二人付き合つとるんやって、とその時侑士が言っていて、そうだったのかお似合いだなと思っただけだった。

別れたのはいつだっただろう。それも覚えていない、というか知らない。いつの間にか日吉は滝の隣からいなくなっていて、今は隣の隣にいる。

滝と日吉は、俺から見てもお似合いの二人だった。

美形同士というのもあるけど、何というか、雰囲気似ているのだ。静かで、落ち着いてて、優しくて。

二人だけの世界が、そこにはあった。

そして俺はずっと、ずっとずっと、それが羨ましかったんだ。

滝にあつて、俺にないもの。

いっぱい、いっぱい、ある。

日吉はどうして滝と別れたんだろう。どうして俺と今付き合っているんだろう。

考えたことなかった。ううん、違う。本当はずっと、心のどこかで思っていたんだ。ただ俺は、恐かった。恐くて、気持ちに蓋をしていただけ。

滝。

俺、日吉の隣にいて良いのかな。

校舎を出ると、一気に寒さが襲ってくる。ポケットの中に手をつ突っ込んでやり過ぎすが、やっぱり寒い。明日からは手袋をしよう。

小さく決意したところで、校門の前で不機嫌な顔をして立っている日吉が目に入った。

「…遅いですよ」

「わりいわりい。教室にまだ残ってる奴いてよ、つい喋っちゃって」

「あんたはもう…」

憎まれ口を叩いているがこの寒い中、わざわざ俺を待っててくれたのだ。何だかんだ言って、日吉は俺に甘い。

「お詫びに何か奢ってやるよ」

「何で上から目線なんですか」

そういえば、日吉が俺に甘えることってないな。いつも俺が、日吉を振り回している気がする。

滝だったら、きっとそんなことないんだろう。お互いがお互いをちゃんと気遣って、俺は年上らしく日吉の悩みなんか聞いたりしたりなんかして。勉強も教えたりするのもかも。俺なんてこないだ、日吉に数学を教わってしまった。日吉はかなり成績が良いらしい。テニス部の中じゃトップなんじゃないかなあと、鳳がのんびりと言って

いた気がする。

…なんてことをうだうだと考えていると、不意に日吉が言った。

「それにしても、この時期に教室に残ってるってことは勉強ですか？熱心ですね、その人」

「え？」

「いや、だからさっき向日さんが言ってた人。その人と喋って遅くなっただけでしょ？」

日吉の口から、滝の話が出てきた。

いや違う。日吉はこれが滝の話だってこと知らないんだから、仕方がない。仕方ないって、何が仕方ないんだ？

「…うん。偉いよな」

「そうですね」

そして日吉は、

「向日さんも見習ったらどうですか？」

と、笑った。

その笑顔が、綺麗で、本当に綺麗だったから、俺は何にも言えなくなってしまった。

なあ、日吉。

お前、俺のことどう思ってる？

見た目も中身も餓鬼っぽくて、小さいことにムキになって、そんな俺をどう思う？

俺、きつと滝みたいになれないよ。ああいう風になりたいけど、頑張ろうって思うけど、きつとなれない。

なのに、それなのに、俺はやっぱお前が好きなんだ。全然お似合いじゃないけど、そんなのずっと分かってたけど、お前の隣にいたいって思う。

なあ、日吉。

俺、どうすれば良いのかな？

「向日さん」

ふと、日吉が足を止めた。何だよ、と振り返ると、日吉の目の先にはこないだの自動販売機。

「奢ってくれるんでしょう？」

にやりと笑う日吉。そういえば、さっきそんなこと言った気がする。馬鹿だな、俺。

「分かったよ…ちょっと待ってる」

ポケットの中の小銭を探し、日吉に渡す。
あーあ。

「あれ、向日さんは飲まないんですか？」

「あー…、今日はいいや。あんま喉渴いてないし」

「そうですか、では遠慮なく」

日吉は小銭を自販機に入れ、ちゃりんと無機質な音が響く。

そして、日吉のまっすぐ伸びた長い指は珈琲のボタンに近付いていく。

こないだと、同じ様に。

あーあ。あーあ。

ふう、と白い息を吐いて俺は灰色の空を見上げる。

今日は、寒いな

がちゃんと珈琲が落ちる音が聞こえた。

これおつりです、と日吉が十円玉を八枚渡してくる。こんなの貰っておけば良いのに、日吉は変なところで律儀だ。そして俺は、日吉のそんな性格も、好きだ。

「…サンキュ」

受け取った小銭は日吉の手の温度がまだ残っていて、少しあったかい。日吉の体温。ちょっとだけ寒さが和らいだ気がするの、きつと気のせいなんだろう。

そして日吉は、カチッとプルタブを開けた。

シュワッ

あれ、この音。

何だか、妙に耳に馴染む音だ。今まで俺が聞いてきた音の中で、特別鮮明に耳に残っている。

当たり前だった。だってこれは、俺が好きな炭酸飲料特有の、泡が弾ける音だ。小さい頃から、数え切れない位、聞いてきた音。

まっすぐ、多分学校を出てから初めて、まっすぐに日吉を見た。

相変わらずの無表情で黙々とメロンソーダを飲む日吉を、見た。

一度も缶から口を離さず、ごくごくとメロンソーダを飲む日吉。それに合わせて、日吉の細い首に浮き出た喉仏が上下する。
ああ、そんなに勢いよく飲んだら。

「…っ」

日吉は咄嗟に口を押さえたが、少し遅くて、けぶ、という可愛らしい音が漏れてしまった。

その途端、真っ赤になる日吉。

日吉もするんだ、あれ。

「…一気に飲んだら、誰でもそうなるよ」

「…初めて飲んだんだから、知りませんよそんなこと」

真っ赤になったまま、ぼそぼそと言う日吉が可愛くて可愛くて、俺はさっきまでのもやもやした気持ち、弾けて消えていくのを感じ

た。

「初めて飲んだんだ？感想は？げっぷ以外で」

「もう忘れて下さい…」

恥ずかしそうに顔を伏せる日吉。そしてぼそっと、

「…甘いですね」

と言った。

まあ、そうだろうな。そんなこと分かり切ってるのに、何でわざわざ飲むのかな。

その答を、俺はよく知っていた。ただずっと、気付かないふりをしていただけ。だから俺は、いつだってこの一年下の恋人に適わない。

顔を伏せたまま、でも、と日吉が続けた。

「不味くはないですね」

日吉は無口で自分の感情をあまり表に出さないから、何を考えているのか分からないことも多い。多分俺は、日吉の知らないところ、たくさんあると思う。

ただ一つ言えるのは、日吉は俺が思っていたよりもずっと、周りの人間の感情に聡い奴だということだ。

いつも無表情だけど、言葉は生意気だけど、とても優しい奴なんだ、俺の恋人は。

「日吉！」

「はい」

「好き！」

「はいはい、知ってますよ」

いきなりでかい声で何言ってますか、と小さく笑う日吉。その綺麗な笑顔を見る為に、日吉と身長が十センチ以上違う俺は、少し彼を見上げなければならぬ。

俺と日吉。性格も容姿も雰囲気も、全然違う。お似合いのふたり、なんてお世辞にも言えないのは、誰よりも俺がよく知っている。でも、日吉はそんな俺のことを好きだと言う。こんなに大人っぽくて格好良くて優しい日吉が、俺のことを好きだと言ってくれた。

だから、良いんだ。

俺は綺麗じゃない。大人っぽくもない。

きつとこれからも、つまらないことでうじうじ悩んだり、醜い嫉妬をする自分に嫌になったりするんだろう。日吉と付き合わなければ見ることのなかった自分の嫌な部分、たくさん見るんだろう。

でも、それはきつと、それで良いんだ。だってそうじゃなかったら、日吉と手を繋いだ時の気恥ずかしさは、日吉とキスをした時の切なさ、今の俺のこの感情は、泣きたくなるような、叫びたくなるようなこの感情は、何だと言うのだろうか。俺は綺麗でも大人っぽくもないけど、そこまで弱くはない。

だから俺はきつと、これから日吉を好きでいられる。

「向日さん」

「何？」

「これまだ残ってるんで、良かったら飲んじゃって下さい」

「おー、サンキュ」

日吉が差し出したアルミ缶には、まだ少しメロンソーダが残っていて、俺は一気にそれを飲み干す。

それは確かにこの寒い日に飲むには冷た過ぎる気がしたけど、でもとても甘くて美味しくて、ああやっぱり俺は珈琲よりこっちが好きだな、と思った。

(後書き)

私は珈琲もメロンソーダも飲みません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9123o/>

珈琲

2010年11月14日16時31分発行